

学生の確保の見通し等を記載した書類

目次

(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況	p 2
① 学生の確保の見通し	p 2
ア 定員充足の見込み	p 2
イ 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要	p 2
② 学生確保に向けた具体的な取組状況	p 3
(2) 人材需要の動向等社会の要請	p 4
① 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）	p 4
② 上記①が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠	p 4

(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

① 学生の確保の見通し

ア 定員充足の見込み

今回、文学部では入学定員を、史学科では 85 名から 95 名へ、日本語日本文学科では 110 名から 115 名へ、フランス語圏文化学科では 80 名から 65 名へと変更するが、3 学科を合計した入学定員数は 275 名でありこれまでと変更はない。また本学部他学科の入学定員に変更はないので、本学部全体の収容定員数も 2700 名のまま変更はない。

史学科においては、一般入試志願者・受験者ともに直近の 5 年間では増加の傾向にあり、入学定員数を充足していくことが十分に可能であると見込まれる。仮に推薦入学者や特別入試の枠組みを除いた一般入試のみの数値を用いて示すならば、平成 31 年度一般入試の志願者数は 923 名であり、入学定員変更前の定員数 85 名で割った倍率は、10.85 倍となる。入学定員が 10 名増加した定員変更後は、これが 9.71 倍となるが、この数値でも入学定員を今後充足することが十分可能である。

日本語日本文学科においても、上記の史学科と同様に直近の 5 年間で一般入試志願者・受験者は増加の傾向にあり、入学定員数を充足していくことが十分に可能であると見込まれる。史学科と同様に、平成 31 年度一般入試志願者数 927 名で、入学定員変更前の定員数 110 名を割った倍率は、8.43 倍となる。入学定員が 5 名増加した定員変更後は、これが 8.06 倍となるが、入学定員を今後充足することが十分可能である。

フランス語圏文化学科においては、直近の 5 年間での志願者数は上下していた。過去 5 年間で最も少なかった平成 28 年度一般入試の志願者数は 253 名であったが、この数字に対する定員変更前の定員数 80 名を基にした倍率は、3.16 倍であった。定員変更後は、最も少なかった平成 28 年度の志願者数 253 名に対しても、定員 65 名を基にすると、3.89 倍となり、現在でも定員充足には十分可能な状況ではあるが、より改善された数値となると期待できる。

イ 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

平成 27 年度以降、史学科・日本語日本文学科・フランス語圏文化学科に入学を希望した受験者の動向を資料 1 に示した。あわせて文学部全体に対する数字も示している。上記アでも言及したが、この表からわかるように、史学科・日本語日本文学科では、ここ 5 年間ほど志願者数は増加傾向が続いており、定員数に対する 8 倍以上の一般入試受験者を確保することができている。さらに、指定校推薦・公募制推薦等による入学者を加えれば、十分に定員充足を達成することができる。

このため、両学科で今回入学定員を増加するに際しても、従来から行ってきている学生確保のための取り組みはそのまま継続して行うことにし、大きな変更を行う必要はないと考える。

フランス語圏文化学科については、直近の5年間において一般入試における志願者数は上下しているが、最も少なかった平成28年度でも変更前の定員数に対して、3.16倍の数があった。入学定員の変更によって、この数値はより改善が見込まれる。さらに、指定校推薦・公募制推薦等による入学者数も、これまで安定的に維持されてきており、今後もこれまでと同様の取り組みを継続して維持することによって、定員充足のためにより条件が改善されると見込まれる。

また、各学科の入学定員変更に伴う入学納付金の変更はなく、この点での学生確保への影響はない。

以上のように、定員変更後の各学科の入学定員及び収容定員に対する学生の確保は、十分に行うことができると考える。

② 学生確保に向けた具体的な取組状況

本学では、毎年オープンキャンパスを複数回実施しており、ここ3年は年間で5日の実施となっている。文学部では、各学科ごとに行われる学科説明や模擬講義のほか、各学科の閲覧室等の施設見学を行うことによって、本学部の教育環境の優れた面を広く知ってもらうよい機会となっている。

また、本学部の内容を広く知らせるための資料として『文学部がわかる小事典』を毎年学部独自に作成し、オープンキャンパスや各高等学校への出張講義の際に配布している、大学全体の情報を載せた『学習院大学 大学案内』とともに、学生確保のための広報活動に活用している。

さらに、本学部及び本学部各学科においては、学部のホームページや学科ごとのホームページなどによって独自の情報を発信しており、『学習院大学 大学案内』や『文学部がわかる小事典』のような冊子による情報提供だけでなく、近年の高校生の情報獲得手段に合わせた取り組みも行っている。

このほか、高等学校からの出張講義の要請があった場合には、学科ごとに対応して高等学校側の希望に添った形での模擬講義や学校説明を実施できるように努力している。今後もこうした機会を通して本学部の魅力を伝え、教育のあり方への理解を深めてもらう努力を継続していきたい。

これまで、上記のような取り組みを行うことによって、本学部各学科では学生確保に十分な実績を上げてきた。今後については、文学部全体で有用な取り組みをさらに模索していきたいと考えているが、当面、現在まで効果の上がっている上記のような取り組みを維持することによって、学生確保のための努力を継続したいと考えている。

(2) 人材需要の動向等社会の要請

① 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

文学部の教育においては、学生に人文科学諸分野の研究内容を理解させ、研究方法を取得させることを、講義・演習を適切に組み合わせたカリキュラムによって行っている。そして、理解を深め研究方法を身につけた学生自らが、人文科学諸分野の研究を行うことを教育課程の中に課している。各学科でのこうした教育を通して、人文科学諸分野の文化創造の経験を積ませることにより、社会の一員として社会全体の文化を考え、文化を支え、文化を創造する担い手として送り出すことを目的としている。このことは、今回の定員変更を行う3学科を含めて、本学部全体に共通するものである。

② 上記①が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

今回定員変更を行う3学科では、資料2のように、さまざまな分野の企業等で活躍する人材のほか、中・高等学校教員も多数輩出している。また、大学院に進学しその後に研究者として活躍する者もいる。こうした進路選択の幅の広さは、本学部での教育が社会のさまざまな分野において活かされ、個々の学生の培った能力が社会での多くの分野での人材需要に応じたものとなっていることを裏付ける。今回の定員変更においても、社会から求められている人材需要を踏まえている点については変わることはなく、現在の人材需要の動向を踏まえたものである。

学生の確保の見通し等を記載した書類に関する資料

資料1・・・過去5年間の学習院大学文学部史学科・日本語日本文学科・フランス語圏文化学科の受験者動向

資料2・・・学習院大学文学部史学科・日本語日本文学科・フランス語圏文化学科の進路一覧